

スクナサマの水の旅

作 川村 優理
絵 川村 明日香



ムジークフェストなら2020

ソプラノ岡田由美子&児童文学作家川村優理ジョイントコンサート

開催日時・令和2年6月3日(水)午後1時30分

会場 ・登録有形文化財「藤岡家住宅」大広間

『日本書紀』千三百年

〔水の旅〕

コンサート中 音楽劇

(脚本)

スクナサマの水の旅

作 川村 優理
絵 川村 明日香

出演

提灯屋 吉之助 木村 直子さん

質屋のまりちゃん 南木 優子さん

薬屋の番頭さん 峠之内靖(とうのうちに やすし)さん

スクナサマ 岡田由美子さん

おはなし 川村 優理

劇中歌 『日本書紀』

ご紹介・川を見つけてくれている人 山本伸二さん

亀を育てている人 櫻本泰教さん

水琴窟を見つけてくれた人 峠之内靖さん

音楽 ソプラノ 岡田由美子さん

ヴァイオリン 木村直子さん

ピアノ 南木優子さん

提灯屋の吉之助と、質屋のまりちゃんは、山に囲まれた五條の盆地に住んでいます。

盆地の真ん中を東西に通りぬける「唐橋通り」からはしは、紀州のお殿様の行列が、お伊勢

参りをするときにも通っていったという街道で、吉野川という大きな川に沿って、ま

っすぐに伸びています。

吉野の山々から流れ出た吉野川は、途中で、紀ノ川と名前を変え、おとなりの紀伊

国、橋本の町に入っていきます。

唐橋通りのちようど真ん中の、赤い唐橋は、大坂と五條盆地の境にそびえている「金

剛山」から流れてきた寿命川が、この吉野川と合流するところにかかれています。

吉之助の提灯屋と、まりちゃんの質屋は、この唐橋をはさんで、となり合っています。

した。

朝は寺子屋。昼は、店番。

唐橋通りを通り過ぎていく旅の人や、川を流れていくいかだを眺め・・・

それでも、吉之助は、提灯作りの手伝いをし、まりちゃんは、店のそうじをし、二

人はけっこう忙しく、毎日を過ごしているのですが・・・

「ね、まりちゃん。菓屋の松寿軒さんちに行く。」

吉之助が、まりちゃんちの質屋の店先をのぞきました。

「吉之助、また店番さぼってる。」

まりちゃんは、質屋であずかったばかりの硯石を、井戸の水で綺麗に洗っているところだ。

「墨がこびりついた硯も、洗えばこんなに綺麗になるんだよ。」

まりちゃんは、水をくぐらせるだけで、硯が見違えるように綺麗になることがおもしろくてなりません。

「墨の下からこんな水色のまあるい模様まで、ほら、出てきたよ。」

すずり石には亀が掘ってあり、まりちゃんが洗って見つけた透き通った模様は、龍の甲羅の飾りのように見えます。

「なんと立派なすずりがあるもんだねえ。おいらの手習い用のすずりとは、おおちがいだ。」

そりゃあそうだと、まりちゃんは、うなずきました。

「で、まりちゃん。すいきんくつって知ってるかい？」

「知らない。質屋にも、そんなものは置いてない。」

「見に行こう。金剛山のふもとのお屋敷の、茶室の横に、すいきんくつがあるらしいのさ。すごいたからものだよ。」

質屋のあとつぎをするまりちゃんとしては、ぜひ、見ておかなくてはなりません。

遠い道のりを歩きながら、吉之助は、まりちゃんに水琴窟の話をしました。

「なんでも、手水鉢の下に、からっぽの池があって、手水鉢の水が池に落ちると、びっくりするような綺麗な音が鳴るそうさ。それがすいきんくつ。」

「吉之助の話じゃ、よくわかんないよ。」

「手水鉢の下の池には、おおきなツボが埋めてある。手水鉢の水が、池の底の穴から下に落ちる。すると、落ちた水が、土の中ツボに落ちて、その落ちた音が、ツボに響いてきれいな音になるんだって。」

「松寿軒の番頭さんが来てさ。今度、水琴窟の音を楽しむ会を開くから、そのとき庭に灯す、特製の提灯を注文したいって。」

吉之助の夢は、提灯屋のあとつぎになることです。

吉之助の絵を描いた提灯に明かりを灯し、盆地の町のあちこちにつるしたいと思っっています。

「吉之助の絵じゃ無理かもね」

「よくわかんねえ。でも、おいらの絵の練習張を見て、感心してくれてたから、うまくいけば、そのちようちんを描かせてもらえるかもしんねえ。」

「だどいいねえ、吉之助。」

薬屋、松寿軒の番頭さんは、二人を奥の庭に通してくれました。

「小堀遠州こぼりえんしゅうの作った庭です。」

奥の茶室の下に、金剛山の石で作った、小さな池があります

ておけ 手桶に水を汲んできた番頭さんが、ひしゃくで、池に水を流すと、水は、池の底にある小さな穴に吸い込まれるように落ち、しばらくしてから、きらきらと、綺麗な音が響きました。

「どうですか？いい音でしょう。実は、私がお掃除をされていて、見つけました。」

二人は、池を作っている石の上に腰かけました。

水の音は、二人を包み込むように響き合って流れていきます。

「庭の川には、金剛山の水が流れていきます。」

番頭さんに言われて振り返ると、お茶室の反対側には、庭を通り抜ける川が作られていました。

金剛山は、昔から、神様のいる山だと言われています。薬屋の松寿軒は、金剛山の水と、庭で育てている薬草で薬を作るので、よく効く薬ができると評判でした。

庭を流れる川も、金剛山の石ばかりで作られていました。

「ほんとにきれいな水。」

まりちゃんは、さつき洗っていたすすり石が、水を通すと、綺麗になることを思い出していました。

「石の中から宝物が出てきそうだよね」

吉之助も、同じように思ったのでしょう。
すると――

ふたりは、庭を流れる川を、緑の葉っぱが一枚、ゆったり、ゆったり流れていくのに気がつきました。

それから・・・おやおや・・・

「吉之助、あの葉っぱの上に、だれか乗ってる。」

親指ほどの小さい人が、葉っぱの上に乗って、ゆうゆうとあたりの景色を眺めています。

「だれ？」

吉之助のつぶやく声が聞こえたのか、その小さな人は、二人の方を振り返って、にっこり笑いました。

「わしはスクナヒコナ。金剛山の、薬の神様じゃ。」

番頭さんが、小さい神様に声をかけました。

「スクナサマ。今日も、雨上がりの葉っぱで水の旅ですか？」

白い着物をきて、白いはかまをはいたスクナサマは、ちょうど水琴窟に流れる水のような、小さくて、綺麗な声で言いました。

「おや番頭さん。おや、みなさん。」

吉之助とまりちゃんは、あわてておじぎをしました。

「葉っぱに乗るのがお上手ですね。」

まりちゃんが言うと、スクナサマは、にこにこ笑って、葉っぱの下を指差しました。

「この家の主の亀めしじゃよ。」

亀も、泳ぎながら、ゆっくりと二人を振り返り、それから、また、スクナサマを乗せて、川を下って行きます。
吉之助は、水琴窟の池にかかげる提灯に、亀と葉っぱとこの小さい神様の絵を描いてみようかなと思いました。
「お好きな絵を描いてごらん。お店のだんなさまに見てもらって、合格したら、あなたの提灯をここにかけましょう。」
番頭さんには、吉之助の気持ちがあつたのでしようか。
番頭さんが、ひしゃくで、水をまくと、また、水琴窟がきらきらとした音を奏でました。

どこからか、スクナサマの歌声が聞こえます。
葉っぱに乗った小さい姿は、もう見えませんでした。スクナサマの歌声は、川の波に乗り、庭の、椿の木角を曲がっていきました。

それ すみ あきらかなるものは
たなびきて あめとなり
おもくにごれるがこりたるは、
つついて つちとなる
(其れ清陽なるものは)
(たなびきて 天となり)
(重く濁れるが凝りたるは)
(浅滞いて池となる)

あめつちひらくるはじめに
くにつちの うかれただよへること
あそぶ いをの
みづの上をうけるがごとし

(開闢くる初めに)
(州壤の浮れ漂へること)
(遊魚の)
(水上に浮けるが猶し)
『日本書紀』冒頭部分より



藤岡家の庭を流れる川